戦争に協力しない！させない！

練馬アクション

Web 版第５号　2025 年９月１日号

大軍拡と基地強化に NO!アクション 2025 発足集会(8 月 2 日）お話をしてくださったのは、呉羽真弓さん(京都・祝園ミサイル弾薬庫問題を考える住民ネットワーク共同代表)

【巻頭言】 参院選敗北後の石破政権の“お仕事”を検証する

■政局動向

自民党は、参院選総括を９月２日にも開く両議員総会で示す。森山幹事長辞任（影の幹事長に）、石破総裁続投との説もある。同総会で総裁選前倒が決まる可能性もある。だが、８月 27 日、自民党の総裁選挙管理委員会は、総裁選前倒しに賛成するかを確認する際、書面の提出を求めるほか、氏名を公表することを決めた。公表を迫られると、賛成しないと旧派閥から睨まれるし、総裁選前倒しが成立しないと執行部から干される。前倒し賛成で総裁選石破支持という者もおり、石破が再選されても干される。新総裁が選ばれ総選挙となるのは避けたい議員も少なくない。石破続投になるのか、総裁選、そして解散総選挙になるのか、予断を許さない。

だが、政局がどう転ぼうと、石破の残した遺産は引き継がれる。それを検証しておこう。

■日米関税交渉合意は経済安保推進合意

石破が合意するなでは辞めないと言っていた日米関税交渉は、７月 22 日に合意した。その中には、日本企業による米国への投資を通じて、経済安全保障上重要な半導体、医薬品、鉄鋼、造船、重要鉱物、航空、エネルギー、自動車、人工知能（AI）・量子の９分野で強靭なサプライチェーンを米国内に構築するために連携することが入っている。関税交渉は、経済安保交渉であり、その推進が合意されたのだ。

■日韓･米韓会談

経済安保での連携は、日米二国間だけではない。その代表例は、海軍力にも関係する造船分野での日米韓の連携である。8 月 23 日に来日した李在民・韓国新大統領との会談では、水素、ＡＩなど、未来産業分野における協力でも一致。北朝鮮の核・ミサイルの脅威に対応して日米韓協力、北朝鮮によるサイバー活動や露朝軍事協力の強化への共同対処も確認。日米韓軍事一体化は変わらない。李大統領は、日韓会談雄成果を土産に訪米。金正恩国務委員長との会談をできるのはトランプだけとトランプ持ち上げた。一方、トランプは、李大統領に在韓米軍基地の所有権を譲渡するように迫った。朝中離間を企図して対北融和を目論むとしても、対中戦略から在韓米軍基地は強化したいというのが、トランプの本音と言えよう。日米韓軍事一体化を進めつつ米朝会談を促しても北朝鮮が乗るわけがない。金正恩国務委員長は、９月３日に行われる抗日戦争勝利 80 年記念式典出席のために金正恩が訪中する。日米韓と中朝露の対峙構造が強まり、日米韓軍事一体化に拍車がかかる。悪循環だ。

■戦没者追悼式式辞で｢反省｣の正体

日韓の関係構築は、李大統領が歴史問題に触れず、“実用主義” に徹したからだ。石破も戦没者追悼式の式辞に「反省」という言葉を盛り込む配慮をした。といっても歴代首相の立場を引き継ぐと言っており、それは安倍の談話も引き継ぐことを意味しているということだ。つまり、戦後補償問題は解決済とすることに変わりはない。ネトウヨには石破叩きが横行しているようだが、火消しを図っている極右の論客もいる。

■参政党に言われるまでもなく｢不法移民ゼロプラン」

石破を「リベラル」とみなす言説が「リベラル」の一部にももあるが、とんでもない誤解だ。出入国在留管理庁は、参院選を二カ月遡る 2025 年５月 23 日、｢国民の安全･安心のための不法滞在者ゼロプラン」を始めている。

アフリカ開発会議（８月 20 日～22 日）「横浜宣言」では「安全で秩序ある正規の移住及び人の移動」「非正規な移住の根本原因に対処」が盛り込まれた。高度人材獲得、国家間協定に基づく「人材育成」という名の “搾取できる労働力”の導入､移民排斥という西欧でもトレンドになりつつある入管体制の構築が目論まれているのだ。

■アフリカ開発会議｢横浜宣言｣

「横浜宣言」の他の内容は、新自由主義的政策のオンパレードだ。農業では輸出商品作物生産を拡大させ、日本企業の投資拡大で資源開発と第一次加工程度の工業化を促し、インフラ投資も拡大するというものだ。中国による “債務の罠” への非難を滲ませつつ、アフリカ信用格付機関（ＡｆＣＲＡ）の設立を謳う。トランプを念頭に保護主義を非難し、｢インド・中東・アフリカ経済圏構想」を示唆する。加えて、ソマリアなどでの自衛隊の活動を称賛し、アフリカ二カ国の非常任理事入りなど日本の常任理事国入りにつながる国連改革を表明している。

■日印首脳会談

８月 29 日の日印首脳会談では、安全保障協力に関する共同宣言を 17 年ぶりに改定し、重要鉱物や人工知能（ＡＩ）に関する新たな協力枠組み「経済安保イニシアチブ」創設で一致。今後 10 年間で 10 兆円の民間投資を目指すと伝えた。トランプからロシア産石油を輸入していると 50%関税にさらに上乗せ攻撃を仕掛けられ、中印陸路貿易再開などに動き出しているインドと関係を強化する裏には、米印関係がギクシャクしてもインドを対中包囲網につなぎ止め、クワッドを維持したいという思惑が垣間見える。

☆外交に偏った参院選敗戦後の石破の“お仕事”を批判的に検証しよう！　　　　**（文責:池田）**

【活動日誌】

8月2日　大軍拡と基地強化にNO！アクション2025 結成集会　学研都市にミサイル弾道弾！黙って見過ごしてよいの？　お話:呉羽真弓さん(京都・祝園ミサイル弾薬庫問題を考える住民ネットワーク共同代表)

8月4日　辺野古への基地建設を許さない実行委員会、防衛省行動。練馬アクション、要請、提出(資料参照)。

8月11日

・国家・天皇による慰霊・追悼を許すな！　8・11集会　「戦後80年」「昭和100年」を問う
　北村小夜さん　「昭和100年」が喧伝される不穏な時代に
　池田五律　「戦後80年慰霊の旅」という象徴天皇制の政治

・差別・排外主義を許さない！8・11緊急アクション　主催:差別・排外主義に反対する連絡会

8月12日～13日　入隊したらさぁ大変！自衛隊　練馬パネル展
　両日とも15:00からパネル解説　解説者:大内要三さん
　12日　オンライン講演　元自衛隊員セクハラ被害者の証言　お話:魚住真由美さん
　13日　資料映像&解説

8月15日　国家・天皇による慰霊・追悼を許すな！　「反靖国」デモ

8月17日　トランプの創る世界にNO！を8・17集会　主催:トランプ来日・石破&天皇会談に反対する実行委員会
　問題提起:鵜飼哲さん「西欧から見たトランプが創る世界」／佐原哲哉さん「中東とトランプ時代のアメリカ」／本山央子さん「ジェンダー・セクチュアリティの権利に関するトランプ政権の攻撃と日本への示唆」

鵜飼さんの報告より平和のためのフランス・ユダヤ人連合／ツェデク(正義を)!脱植民地派ユダヤ人集団／停戦を求めるユダヤ人&ムスリム(パリ、2023年12月)

8月27日　緊急集会「子どもの権利は私たちになぜ適用されないのですか？入管庁による子どもと、親の送還を今すぐやめてください」　主催:反貧困ネットワーク・仮放免高校生奨学金プロジェクト

8月30日　勝手に煽るな！防災に名を借りた戦争訓練─防災・「避難」・治安出動
　主催:米軍・自衛隊参加の東京都総合防災訓練に反対する実行委員会
　協力:戦争に協力しない！させない！練馬アクション／あるこう会(板橋)
　問題提起:池田五律「そもそもって何？国民保護法」／渥美昌純さん「役に立つのか？国民保護訓練」／中川信明さん「子どもを巻き込むな！Jアラート避難訓練」／藤田五郎さん「差別の元凶！小池都知事」
　※先立って練馬駐屯地への抗議申し入れ⇒資料2参照

【報告】核も戦争もない 平和な21世紀に！ 被爆80周年原水爆禁止世界大会福島大会

東日本大震災・福島原発事故の教訓から学び、核兵器と戦争のない世界、脱原発社会の実現をめざす!7.26福島大会

練馬区職員労働組合
執行委員長 矢内 幸夫

戦後80年、被爆80周年を迎えた原水爆禁止世界大会が、今年も7月26日(土)に福島県からスタートし、私も参加しました。2年ぶりに福島市飯坂温泉の「パルセいいざか」を会場として開催されました。飯坂町の飯坂温泉は、東日本大震災時の原発事故により多くの方が避難し、一時的に生活の場とされた地域でもあります。

先に行われた開会集会では、東日本大震災で亡くなられた方々への黙祷に続き、染裕之氏（平和フォーラム）による主催者挨拶、角田政志氏（福島県平和フォーラム共同代表）による現地実行委員長挨拶、そして谷雅志氏（実行委員会事務局長）による大会基調の提起が行われました。大会基調では、ウクライナ戦争やイスラエルによるガザ侵攻など、終結の見通しが立たない戦争の現状に触れ、「核兵器」の使用を容認する発言の問題や、核保有国による兵器の「近代化」（小型化・高性能化）と技術向上が進み、作戦配備または将来用貯蔵の現役核弾頭数が増加していることから、核軍縮が遠のいているという厳しい世界情勢が指摘されました。被爆国である日本政府が国際社会で果たすべき役割は、核兵器の明確な否定と平和憲法の堅持であるべきです。しかし、アメリカの「核の傘」に依存し、核兵器禁止条約（TPNW）に対して消極的な姿勢を貫く日本政府が、国際社会から信頼を得ることは到底考えられません。また、「核抑止論」が現実的なものとして受け入れられる風潮をどう乗り越えるかが問われています。核抑止論は、核の脅威のもとに成り立っており、核戦争の危機が常に隣り合わせであることを訴えていく必要があります。そのような中で、世界の被爆者とつながりながら、核のない世界を希求し、各地の日常における原水禁運動に活かせる大会にしていこうという提起がなされました。一過性ではなく、継続的な運動の継承こそが、日本政府や国際社会を動かす力になるのです。

全体集会では、原水禁世界大会共同実行委員長の金子哲夫氏による「被爆80年　核と人類は共存できない　～核なき世界をめざして～」と題した基調講演が行われ、各分野および各地からの報告もありました。　最後の高校生平和大使による訴えでは、歴代の大使やOBによる短時間のパネルディスカッションが行われ、核兵器や原発問題に対する率直な声を聴くことができました。次回は、この企画を中心とした集会でも良いのではないかと思いました。

参議院議員選挙では、右派系の新興政党の候補者からは、「核抑止論」、コスト安の「核兵器」、「原発振興論」などが風潮され、多くの議席を獲得しました。これらの政党の候補者に投票してしまうのは、SNS活用がうまいことだけでなく、新自由主義政策が国民生活を脅かしたことが背景にあると私は考えます。
私たちが望む政治家は、武力ではなく話し合いで紛争を解決し、多様性を認め、私利私欲に走らず、平和で豊かな社会、安心して生活ができる社会の構築を目指す人です。

戦後 80 年の広島を訪れて

八田 祐司(練馬区職労)

大量殺戮を目的として人類が作り上げた原子爆弾が、初めて広島に実戦投下され、瞬時に二十余万の人命を奪ってから 80 年の月日が経ちました。また、日本中を震撼させた福島第一原子力発電所の爆発事故による壊滅的傷痕から 14 年が経ています。核分裂を「平和利用」であろうと兵器であろうと、人災としての放射能の恐怖を 3 度も経験したにもかかわらず、再び日本政府は原子力依存への道を歩み始めました。今なお癒えぬ「被爆」と「被曝」の鎮魂と平和の祈りに包まれた広島を、自治労東京・区職連絡会主催の広島親子スタディーツアーで訪れました。

軍都であった広島には、「米軍による人類虐殺兵器・原子爆弾の被弾」と「旧日本陸軍による無差別殺戮を目的に中国戦線で実戦使用した毒ガス製造」という「戦争の被害と加害」の歴史事実が混在しています。

今では国民休暇村もあり瀬戸内の観光リゾート島となった「ウサギの島＝大久野島」は、先の大戦で島全体が毒ガス製造工場と化し、その存在を隠蔽するために地図から抹消された歴史を持っています。ウサギ島が隠し持つ毒ガス製造工場という黒歴史を解き伝えるため、私たち手製の資料を駆使して案内しました。島内を自転車で周遊する観光客が、一緒に説明を聞く場面も所々でありました。参加者も観光客も毒ガス島の歴史やその被害について、驚きと嫌悪の表情で聞き入っていたのが印象的です。

広島の街が被った被爆の歴史は、当時の校舎の一部を使った本川小学校平和資料館や平和記念公園にある広島平和祈念資料館が、原爆被害の実相を如実に教示しています。

被爆者の平均年齢が 86 歳を超えるなか、日本被団協のノーベル平和賞受賞は文字通りの朗報でした。その日本被団協の箕牧代表委員は、原水禁大会でご自身の被爆体験を語られ、核兵器も戦争もない世界の創出を訴え、戦火が続くウクライナやガザに思いを馳せるお話となりました。

長崎大学核兵器廃絶研究センター核弾頭データ追跡チームによると、本年 6 月時点で 2018 年から 25 年の核弾頭数は米国 100 個、露国 36 個減少していますが、増減なしの仏国を除くと 6 ヶ国で 500 個の現役核弾頭が増えています。中国、北朝鮮の増加率は 3 桁に達しています。しかしながら米露が減少しているといえ現役核弾頭の保有数は米国 3,700 個、露国 4,310 個と米露で現存の 9,615 個のうち 83.3%を占めています。「存在する限りは使われうる」と同センターは警鐘を鳴らしています。ウクライナ戦争でも露国は核使用の恫喝をしました。80 年前の 20 余万人の惨たらしい死や今日なお原爆症で苦しむ被爆者をあざけ笑うような現状です。高校生平和大使が発言していた「微力だが無力でない」活動に救われた思いでした。

福島・広島・長崎の辛苦は、今なお継続されており、巨悪に抗する一歩一歩の運動が大切であることを、六日の夕べに流した灯篭に記し、広島を後にしました。

<資料１>

石破茂　内閣総理大臣　殿
中谷元　防衛大臣　殿

辺野古米軍新基地建設の断念等を求める要請

防衛省は今夏にも、軟弱地盤が広がる大浦湾を埋め立てるための土砂投入を始める方針を固めたと報じられている。既に防衛省は、昨年 12 月、同地盤の海底に砂を敷く作業に着手し、今年１月から砂杭の設置を始めている。その対象以外のエリアで、新たに土砂投入をしようというのだ。

中谷元防衛相は、２月５日の衆議院予算委員会で、2025 年度末までに投入される埋め立て土砂量について辺野古側で 318 万立方メートル、大浦湾側で約 36 万立方メートルとなる見込みだと答弁した。計 354 万立方メートルの土砂量は政府が計画する総量 2020 万立方メートルの 17.5%にすぎず、2024 年 12 月末の 16.1%から約１年間で進むのは１％程度だと指摘されている。新基地総事業費 12.2 兆円の約 81%を 25 年度までに支出することになり、政府の見積もりを超過するのは明らかだ。そもそも、軟弱地盤の埋め立て無理とも言われている。永遠に湯水のように費用（税金）を投じ、ゼネコンを儲けさせ続けるつもりなのか！

“工事のための工事”を何のためにやるのか？　基地建設反対の民意に従わないことを誇示すること。「国が決めたことはやめない」という姿勢を見せつけること。「『国家に逆らっても無駄だ』と民意を挫いてやる」という決意を示すこと。政府・防衛省は、反対運動潰し自体を工事目的にしていると言わざるを得ない。

“工事のための工事”を続ければ続けるほど、環境破壊は進む。それが引き起こす影響は計り知れない。土砂の調達先の候補地には、沖縄戦の激戦地で戦没者の遺骨が数多く眠る沖縄本島南部の糸満市や八重瀬町も含まれている。軍事基地建設のために戦没者の遺骨の交じった土砂を使うことは、戦没者を二度戦没させると言っても過言ではない。問題だらけの基地建設を、日本政府は、即刻、やめるべきである。

問題は辺野古基地建設だけではない。性暴力をはじめとした米兵犯罪を放置し、日米地位協定の見直しすらアメリカ政府に要求すらしようしない。一方、石破政権は、アメリカとの関税交渉の合意に沿って、米製兵器の爆買いや経済安保での日米連携の強化をしようとしている。「日米安保をさらなる高みに引き上げる」とも公言している。機能強化が進められようとしている在日米軍司令部と連携する自衛隊統合作戦司令部を発足させた（３月 24 日）。日米共同作戦での自衛隊の役割が拡大され、自衛隊増強が加速している。琉球弧では、同地を“戦場”と想定した“戦争のような演習”が繰り返され、先制攻撃拠点化・要塞化が推し進められている。それと表裏一体で、宮古諸島や石垣島・与那国島などの八重山諸島の住民を「国民保護」という名の“現代版の強制疎開”計画に従わせようとしている。自衛隊も、沖縄戦時の旧軍同様、民衆を守らないことは明明白だ。

石破政権は、明日にでも“台湾有事”が起きるかのような“不安と恐怖”を煽る「中国脅威論」の喧伝を通して自衛隊増強を正当化している。一方、辺野古新基地建設は、政府の言うように埋め立てができたとしても、普天間基地の移設が可能になるまでには 12 年はかかるとされている。それでは“台湾有事”に間に合わないではないか！　このことは、“台湾有事”は軍拡を受け入れさせるための「ためにする」脅威認識に過ぎず、“台湾有事”を政府・防衛省・自衛隊も信じていないことを物語っている。にもかかわらず日米安保を強化することは、緊張を激化させ、確実に戦争リスクを高めることになる。軍拡で平和は作れない！

以上から、以下を要請する。

一、大浦湾への新たな土砂投入を撤回し、軟弱地盤「改良工事」を直ちにやめ、辺野古新基地建設を断念すること。
一、琉球弧の自衛隊増強をやめ、住民を「避難」の名で暮らしの場から追い出す計画を立てるのでなく、自衛隊を宮古島・石垣島・与那国島から撤退させること。
一、いたずらに“台湾有事”危機を煽ることをやめ、緊張緩和に努めること。

2025 年８月４日

戦争に協力しない！させない！練馬アクション

＜資料2＞

堺一夫 第一師団司令長 殿
柳田常泰 練馬駐屯地司令 殿

「防災」を口実とした部隊進出訓練等をやめるように求める申し入れ

東京都総合防災訓練の度に、第一師団所属部隊、殊に練馬駐屯地所属部隊が出動している。自衛隊の本務は防衛出動、治安出動であり、災害派遣は余技でしかない。装備も災害救援を目的としたものではないし、災害救援を目的としたノウハウを錬成しているわけでもない。

にもかかわらず、東京都総合防災訓練などで、あたかも自衛隊が災害救援を目的とする組織であるかのような印象を広めるパフォーマンスを行うことは、“本務”を偽る情報戦の一形態と言わざるを得ない。

「防災」と無関係な音楽隊を繰り出したこともある。「防災訓練」の“宣撫工作”の場としての利用に外ならない。リクルートにも利用している。東京都総合防災訓練でも、同じ訓練を分業したり、訓練会場を同じくするなど、生徒との接触機会も創ってきた。展示ブースでは、「防災」と無関係な隊員募集資料を配布し続けている。子どもサイズの偽制服”への着せ替え写真撮影コーナーを設置したり、自衛隊車輛に試乗させるなど、児童の“歓心”を買うことを目的にした“展示”も行っている。

近年は、国民保護訓練にも自衛隊部隊が参加しており、東京都で行われているそれにも、第一師団の部隊が参加している。だが、「武力攻撃災害」への対処に関しても、国民保護は自治体の責務であり、自衛隊は戦闘を専らとする。武力攻撃事態に際して戦闘以外で対処するのは「グレーゾーン事態」である。それには“反戦デモ”も含まれる。要するに、前線で戦闘、後方で治安出動というわけだ。

本務からすれば、東京都総合防災訓練への出動は、「防災」に名を借りた治安任務を念頭においた“部隊進出訓練”と言わざるを得ない。その本質は、第一師団が一時首都機能の維持を主任務とする「政経中枢師団」と名乗っていたことからも明らかだ。大規模災害対処でも、その主な任務は「政経中枢機能」の維持だ。

大規模な東京都総合防災訓練の発端となったビッグレスキュー2000 を前にして、当時の石原都知事が練馬駐屯地記念行事において、いわゆる石原「三国人」発言を行って隊員を鼓舞した。小池現都知事も、ヘイト集団の要求を実質的に受け入れ、関東大震災朝鮮人犠牲者追悼式典への追悼文送付を、2017 年以降、中止し続けている。こうしたことは、大規模災害時の「政経中枢機能」維持、即ち治安維持を基軸とした自衛隊の部隊進出が、関東大震災時の朝鮮人虐殺のような事態を再び引き起こしかないことを示している。

東京都総合防災訓練以外にも、「防災」を口実とした治安出動訓練が行われている。2012 年には深夜に練馬駐屯地から都内各地に送り出す大規模な部隊進出訓練が「徒歩行進訓練」の名で行われた。自治体の危機管理部署を中継点とするなど、行政機関を制圧しつつ都心に進進出する姿は、首都戒厳体制を敷く本番さながらの訓練でった。2024 年にも大規模訓練が行われたが、その目的には「地域特性の把握、市街地における機動力等の練度向上」が露骨に掲げられた。今年も、規模は不明だが、東日本大震災が起きた３月 11 日に「徒歩行進訓練」が目撃されている。

このような「防災」利用は「防災」の悪用と言わざるを得ない。

以上から、以下を求める。

一、東京都総合防災訓練において、「防災」と無関係な自衛隊の宣伝や隊員募集活動、音楽隊による演奏をやめること。
一、自衛隊の“本務”を偽った「災害救援組織」であるかのようなパフォーマンスや宣伝をやめること。
一、「防災」を口実とした部隊進出訓練・徒歩行進訓練をやめること。
一、東京都総合防災訓練および国民保護訓練への参加をやめること。

2025 年 8 月 30 日

米軍・自衛隊参加の東京都総合防災訓練に反対する実行委員会

【集会案内】

■戦争に協力しない！させない！練馬アクション第二月曜学習会
○9月8日(月) 19:00 会場:サポート練馬

“戦後80年”天皇・長崎「慰霊の旅」を前にして 原爆の日を振り返る 9・8学習会

報告:広島、長崎を8・6、8・9に訪ねた練馬の仲間他

○10月6日19:00 サポート練馬 どうなる？日本の政治

■大軍拡と基地強化にNO！
軍事費GDP比3・5%～5%への引き上げを許すな！
9・13概算要求分析会

日時 9月13日(土) 13:15開場 13:30開始 予定終了時間16:30

会場 文京シビックセンター4Fホール ※資料代500円

■琉球弧を戦場に想定した日米共同演習

レゾリュート・ドラゴン
に抗議する！
9・13防衛省緊急行動

レゾリュート・ドラゴン2024

9月13日 18:00防衛省前集合

18:30申し入れ書手交

呼びかけ:トランプ来日・石破&天皇会談に反対する実行委員会

■防衛省は概算要求を撤回しろ！

許すな！過去最大の防衛費8.8兆円2026年度大軍拡予算

9・30防衛省行動 18:30防衛所前集合 19:00申し入れ

■朝鮮戦争停戦 70 年に際し南朝鮮で制作されたドキュメンタリー映画(韓国の金哲民さん監督)

WARmericaの運命1・2 一挙上映!!

WARmericaの運命(2023 年)

アメリカ 250 年の歴史と戦争、反人道的犯罪、そしてリアルタイムで進行する帝国の衰退を凝集した話題作

WARmericaの運命 2 巨大な転換 (2024 年)

アメリカの覇権主義に抵抗する国々によって進む新たな世界秩序への転換とアメリカ帝国主義の没落を描いた続編

会場 すみだ生涯学習センター(ユートリヤ) 墨田区東向島2丁目38番7号

※東武曳舟駅「東武伊勢崎線・東武亀戸線」、京成曳舟駅「京成押上線」の2駅が便利です。

9 月 20 日(土) 16:30(予定) 開場
17:00(予定) WARmerica の運命上映 18:30(予定) WARmerica の運命 2 上映
19:45(予定) 鑑賞者の感想・意見の交換・討論会
通し鑑賞券:1500 円 いずれかのみの鑑賞券:1000 円

■池袋アクション サンシャイン五差路情宣

9 月 21 日(日) 13:00~14:00
やめろ!「不法滞在者ゼロプラン」 防衛費 8.7 兆円にNO!等

■難民・移民の親と子どもの日本語教育・母語教育を考える練馬の集い

お話 加藤みわさん
(反貧困ネットワーク)

【日時】 9月 25 日(木)18:30

【会場】 練馬区役所 19 階1907会議室

呼びかけ 難民・移民フェス応援ねりま Keepers
連絡先:080−3012−9373(嘉藤) 協力 ヘイトスピーチ許さない・練馬

■初めて「琉球人は先住民族」と認めた大阪高裁判決から２年

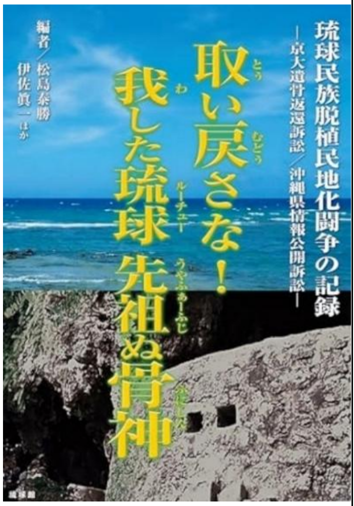
琉球人遺骨の返還を求める練馬の集会

日時 9月26日(金) 18:20開場 18:30開始 会場 練馬区役所本庁舎20階交流会場

お話 與儀睦美(ヨギムツミ)さん(琉球人遺骨返還を求める会/関東 事務局長) ※資料代 500円

呼びかけ 戦争に協力しない！させない！練馬アクション連絡先 090−5208−5803(池田)

『取い戻さな! 我した琉球先祖ぬ骨神:琉球民族脱植民地化闘争の記録
—京大遺骨返還訴訟/沖縄県情報公開訴訟』琉球民族遺骨返還闘争記録集編集委員会(編)



発行:Ryukyu企画(琉球館) A5判 376ページ
定価2750円⇒9・27集会参加者には特別定価2000円で発売予定
【目次】
まえがき(松島泰勝)
第1章 原告の声 松島泰勝(琉球民族遺骨返還請求訴訟 原告団長)／亀谷正子(原告)
／金城實(原告)／玉城 毅(原告)／照屋寛徳(原告)
第2章 琉球民族遺骨返還等請求訴訟の意義
［弁護団］(具良鈺／普門大輔／定岡由紀子／李 承現／丹羽雅雄)
第3章 沖縄県教育委員会情報公開請求訴訟の意義 ［弁護団］(三宅千晶／三宅俊司)
第4章 琉球民族の声 波平恒男(琉球大学名誉教授)他
第5章 連帯の声 木村二三夫(平取アイヌ遺骨を考える会共同代表)他
【資料編】 京都地裁判決／控訴審最終準備書面／大阪高裁判決／沖縄県教育委員会「公文書部分開示決定通知書」
「移管台帳」／関連年表／ほか
おわりに 丹羽雅雄(琉球民族遺骨返還請求訴訟 弁護団長) 三宅俊司(沖縄県教育委員会情報公開請求訴訟 弁護団)
あとがき 松島泰勝(編集委員長)

■10・8国会行動(予定)

10月9日(木)11:00～13:00

呼びかけ 戦争・治安・改憲総行動

■ガザ虐殺戦争開始から２年

中東と難民・移民の現在を考える10・31練馬の集い

中東の現在 田原牧さん

イギリスとドイツのクルド人コミュニティを訪ねて 金井真紀さん

日時:10月31日(金) 18:10開場 18:20開始

会場:練馬区役所本庁舎20階交流会場 ※資料代 500円

〔主催〕 戦争に協力しない！させない！練馬アクション
〔協力〕 ヘイトスピーチ許さない・練馬

琉球弧の戦場化を許さない！11 月行動 への呼びかけ

日本政府は、「台湾有事」への「不安と恐怖」を煽りつつ、琉球弧の自衛隊増強を進めています。2016 年に与那国島、2019 年に宮古島、奄美大島、2023 年に石垣島と、「南西シフト」の一環として軍事基地建設が強行されてきました。2024 年には沖縄島の勝連分屯地にもミサイルが配備されました。「特定利用空港・港湾」として、各島の空港・港湾の民間インフ施設を軍事利用するための拡張・強化も行われています。こうした“琉球弧の戦場化”を想定した自衛隊増強の波は、2023 年から基地建設工事が行われている馬毛島をはじめ、西日本全域に広がりつつあります。

与那国島には、当初の沿岸監視部隊配備という触れ込みを超え電子戦部隊も強行配備され、ミサイル部隊の配備と新港湾（軍港 1200 ㍍×400 ㍍）建設も計画されています。各島のミサイル基地に、先制攻撃に使える長射程ミサイルを配備する動きもあります。防衛省・自衛隊は、さらなる基地強化と、「強靭化」と称して各基地の要塞化を進めています。一方、「国民保護法」という名の“戦争法”に基づいた「避難計画」「(強制疎開) も実施しようとしています。このことは、基地が「軍民分離」の原則と矛盾していることを浮き彫りにしています。島民を追い出して島を軍事要塞化することは、“軍事植民地化”に見られる地元住民の生活破壊の最たるものです。「台湾有事」を理由に自衛隊を増強し、東アジアの緊張を激化させ、また「緊張激化」を理由に自衛隊増強を進めるという矛盾。その矛盾が、琉球・沖縄への差別構造を伴って、琉球弧、とりわけ「先島諸島」に最も顕著に表れているのです。

このような琉球弧の島じまへの自衛隊の軍事強化に反対し、“琉球弧の戦場化を許さない！”という声をあげ、大きく広げたいと考え、「琉球弧の戦場化を許さない！11 月行動」を呼びかける次第です。

宮古島・石垣島・与那国島で基地反対の声をあげている方々をお招きし、共に政府を追及し、それを受けたシンポジウムを開催し、併せて抗議集会とデモを行いたいと考えています。

是非、ご賛同ください。

2025 年「盛夏」

参加・賛同 個人1口：1,000 円 団体1口：2,000 円 ※できるだけ2口以上、お願します 公表(可・否)

＊第一次締め切り日＝8 月 22 日(次回実行委員会)としますが、その後も受け付けます。
賛同費振込先 沖縄・一坪反戦地主会関東ブロック 郵便振替00150－8－120796
※振込用紙の「通信欄」に「11月行動賛同費」と必ず明記してください。

＜琉球弧の戦場化を許さない実行委員会＞

連絡先 沖縄・一坪反戦地主会関東ブロック

〒101－0061 東京都千代田区三崎町 3-3-1 TKi ビル 3F 電話 090-3910-4140
Mail:nowar.ryukyuko@gmail.com

戦争に協力しない！させない！練馬アクションが関わっている企画ではありませんが・・・

知人が講師なので、ご案内します。

人類の歴史と日本国憲法
講師 兒島峰さん（神奈川大学経営学部準教授）

日時 9 月 21 日(日) 13:30～16:30

会場 練馬区勤労福祉会館 2 階会議室 資料代 500 円

主催 ねりま九条の会

【チェックポイント】トランプ･ドクトリンとイラン攻撃＆ウクライナ戦争

バンス米副大統領が６月 24 日、Ｘで「トランプ・ドクトリン」を主張した。それは、①米国の利益を明確に定義する、②その利益に到達するために積極的に交渉する、③必要であれば圧倒的な力を行使するというものだ。

６月、イスラエルに続き、アメリカもイランを攻撃したが、イランによるカタールのアメリカ軍基地への「報復攻撃」の直後、一転してトランプの「仲介」でイスラエルとイランが停戦に合意した。この「12 日間戦争」のイラン側死亡者は 430 人、負傷者 3500 人以上、それらの大半が民間人だと言われる（６月 21 日段階)。イスラエル、アメリカによって、圧倒的な武力行使によって一方的に殺戮する「現代版：植民地戦争」が行われたと言ってよい。

ネタニヤフとトランプは、「輝かしい成功」と語った。だが、イランは濃縮ウランを秘匿し、核施設再建能力を保持していると言われている。そのため、ネタニヤフは体制転覆も射程に再武力行使も辞さない構えを崩していない。一方、トランプは核交渉を優先させている。といっても、英独仏と組んで８月末を期限とした合意を迫り、合意しなければ国連安保理イラン制裁を復活させると脅すといったものだ。「交渉」でなく、“恫喝”と言うのが相応しい。対イラン以外のイスラエルの軍事行動も野放しにしている。

これを先の「トランプ・ドクトリン」に照らしてみよう。アメリカの利益は、体制転覆でなく、イランの核保有阻止であることを明確にする（①)。バンカーバスターによる攻撃（③）→停戦仲介＆核交渉（②）→合意しなければ安保理制裁復活（③）・・・ということになる。

イランの最高指導者ハメネイ師は勝利宣言を発した。「負けた」と言えば高まった国民の団結が損なわれ体制が揺らぎかねないからだ。いくら恫喝されても、核合意を受け入れる可能性は低い。そもそも今イスラエルとアメリカによる攻撃自体が、核開発を促してしまう。その論理は、以下のようなものだ。

> イランはイスラエルとアメリカによる脅威に晒されていることが、今回の攻撃で実証された→その脅威に通常兵器で対抗することは資金的にも技術的にも困難である→比較的安価な核保有によって抑止するしかない→アメリカは、核放棄だけを求めており、体制転覆を図ってしないというが、核開発を放棄したリビヤのカダフィ政権は倒され、カダフィは惨殺されたことを見れば、アメリカを信用することはできない→一方、核開発を進めた北朝鮮は体制を維持している→イランも北朝鮮に倣うべきだ・・・

「圧倒的な力の行使」（③）をチラつかせた「交渉」（③）という名の“恫喝”では、「米国の利益」（①）は達成されないのだ。結局、経済制裁という名の③だけではダメなら軍事力行使という③に行き着くことになる。

８月は、ウクライナ戦争を巡っても大きな変化があった。その最大の転換は、トランプが停戦仲介から包括的和平推進に方針を変えたことだ。それはロシアへのドンバス割譲というプーチン寄りといわるものだ。一方、ウクライナに対しては、「安全の保証」にアメリカも関与することを約束する。その枠組みは「ＮＡＴＯに似たもの」という。「似たもの」は「似たもの」に過ぎず、ＮＡＴＯではない。対露最前線を担わされるのは英独仏だ。アメリカは地上軍を派遣しない。これでは、ウクライナばかりか欧州諸国からも不満が出る。ゼレンスキーは米露ウクライナの三者協議に応じるとしたが、領土割譲は拒否することを独立記念日の演説で示唆した。フランスは、欧州も加えた四者協議を求めている。三者協議自体が成り立たないのではないか、協議したとしても平行線に終わるのではないか。それを見越して、ロシア外相は、「安全の保証」をロシア抜きで議論すべきではないとし、ウクライナ・ロシア首脳会談にも懐疑的な見方を示している。こうした状況を打開するために、トランプはウクライナ、ロシア双方に圧力をかけている。ウクライナに対しては、長距離ミサイル使用に制限を課した。ロシアに対しては、ロシア産石油輸入国への関税追加という脅しをかけている。

「トランプ・ドクトリン」に即せば、最大の「米国の利益」は対中包囲網の形成。「中露を離間させ、序にウクライナの資源を得れば儲けもの。負担は欧州に負わせればよい」というご都合主義が透けて見える。だが、その利益に到達するための交渉は上手く進まず、トランプに残されたカードは、「力の行使」をするぞとの“恫喝”しか残っていないというわけだ。

それどころか、その“恫喝”が「米国の利益」を損ない出した。それを象徴するのがインドの動きだ。トランプがインドに高関税を課したのに加え、ロシア産石油輸入を理由としてさらなる関税を課す動きにインドは反発を強めている。その結果、中印が陸路貿易再開で原則合意するといった「米国の利益」に反する事態まで起きるに至った。トランプのオウン・ゴールだ。

「圧倒的な力の行使」に寄り掛かった「トランプ・ドクトリン」は登場した段階で破綻に瀕しているという観点からも、今後の国際情勢を注視していくべきであろう。

（文責：池田）

【読書案内】 佐原徹哉著『極右インターナショネリズムの時代　世界右傾化の時代』

（有志舎、2025年7月30日、3400円+税）

学生時代からの友人・佐原徹哉さん（明治大学政経学部教授）が久々に著書を刊行した。『極右インターナショナリズムの時代　世界右傾化の時代』だ。

さて内容だが、本書は日本には触れていないが、序章で指定されている**「極右勢力が「コアな支持者の枠を超えて広がる現象」」**は、参政党躍進の情景を見るかのようだ。参政党の躍進も「世界右傾化の時代」の現象なのだ。

本書の最大の特徴は、**「ジハード主義とムスリム諸国の右傾化」**という第二章のタイトルが端的に示すように、「ジハード主義」を「極右」ととらえている点である。その「ジハード主義」の「結節点」となったのは、ボスニア内戦だったと言う（第二章・第二節）。ボスニア内戦期に形成されたセルビアの極右思想と西欧の極右思想との共鳴作用を通して、カウンター・ジハード主義も形成された過程が丹念に跡づけされている。その主な舞台となったのはサイバー空間（第一章　カウンター・ジハード主義とは何か）。第一章のサブタイトルにあるように、**「サイバー空間で続くユーゴスラヴィア継承戦争」**というわけだ。

このサブタイトルに示されるように、本書は“サイバー空間論”としても読み応えがある。その視点は、「第三章　我々はヨーロッパ人種だ！　欧米の極右運動と「入れ替え論」」はじめ、全編で如何なくなく発揮されている。

それにしても、「テロ事件」を起こしたカウンター・ジハード主義者の支離滅裂な犯行声明などを、よく追跡したものだ。第三章は、ニュージーランドでのモスク襲撃事件、カルフォルニアでのシナゴーグでの銃乱射事件、被害者の大半がヒスパニック系であったテキサスでのスーパーマーケット銃撃事件、死亡者全員がアフリカ系米国人だったニューヨーク州でのスーパーマーケット銃撃事件という四つのテロ事件を手掛かりに、新大陸での極右の「核」と新旧大陸の極右の連携に迫っていく。まるで**一見無関係に見える事件の真犯人に迫る犯罪小説**かのようで引き込まれる。四つの事件から浮かび上がってくるのは、**「標的はなんでも良いという不条理さ」**。それが恐ろしい！

だが、本書は恐怖のみを描くホラーではない。四つの事件の犯行者が共通して言及しているの「入れ替え論」から**極右思想史**を辿っていく。「入れ替え論」の元祖は、フランスの極右思想家であるカミュ。彼は、「移民は「繁殖力」が旺盛なので、一世代以後には国民の半数を超えてフランス人と「入れ替わって」しまうから、それを防ぐためには移民を制限しなければならない」と主張した。

極右思想家たちは、「文化相対主義、植民地解放、反帝国主義、反グローバリズムなどの左翼の思想を躊躇なく取り込み」、「エコロジストの議論も包摂」したりしてきた。**だが、彼らの目的は「文化的に定義された民族国家・・・の政治的経済的自立」であったり、それと表裏一体の「移民の抑制」。行き着くところは、「アイデンティティ主義」と言い替えられた人種主義。**

類書にない極右勢力台頭の背景分析も、本書の特色だ。第四章では、**極右の台頭は「移民の増加と何の関係もない」**のであって、**極右台頭の背景は「新自由主義経済政策とそれがもたらした総体的な社会の劣化」**なのだということが、ブルガリアについての事例研究から実証されている。

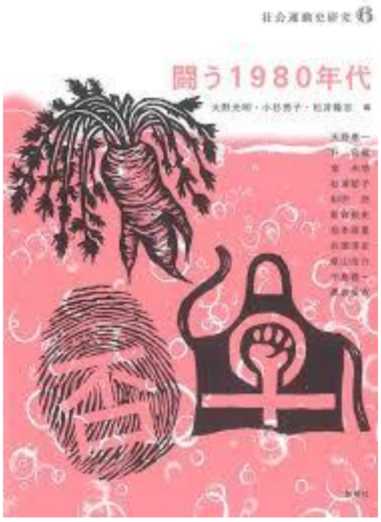
この実証はじめ、本書は、旧ユーゴ、ブルガリア、トルコなど、著者が留学時代からそれらの地域を漁歩してきた経験の結晶とも言えるだろう。

次の「第五章　バルカン・ルート」の「第一節　西欧における都市政策の破綻とイスラムの犯罪視」では、主にフランスを例に、**「リベラルを自称する勢力が新自由主義に基づく政策を進めることで、リベラリズムを風化させ、極右の台頭を助長するメカニズム」**が明らかにされる。さらに同第二節～第四節では、2015年「欧州難民危機」を契機に「ＥＵ資金による強制収容所」建設、「人道支援の犯罪化」、「制度化される人種差別」、「選択的な移民の受け入れ」といった仕組みが―評者風に言えば“リベラル・極右合作”（評者の解釈）で―形成されつつあることがよくわかる。**グローバリゼーションに対応した高度人材の導入、搾取できる移民の受け入れ（それら以外の排除）**・・・というわけだ。日本の入管体制再編も、こうした欧州の動きと機を一にしている！

以上のように、“極右とリベラルの共犯関係”を明らかにした点も、本書の大きな特色だろう。だがそれ以上に**「新たな身分制社会」**という現代世界像を提示している点だ。この世界像は、新自由主義批判からさらに深く掘り下げられた**“現代資本主義論”**に裏打ちされている。中身は読んでのお楽しみ！

専門書だが、各章冒頭に前章のまとめと当該章との関係が簡潔にまとめられているなど、非常に読みやすい。是非、ご一読を！

【自著紹介】大野光明・小杉亮子・松井隆志編『社会運動史研究6　闘う1980年代』新曜社、2025年7月刊　2600円+税



私（松井）は大野光明・小杉亮子との共編で、2019年からシリーズ本『社会運動史研究』を出してきた。形態は「書籍」とはいえ、編者としては「年報」（雑誌）を目指したつもりだったが、今回、本来2024年中に出すはずが半年超遅れ、今年7月にようやく6号が出た。

6号の特集タイトルは「闘う1980年代」。これまでの号では「1968年」や「メディア」、国境を越える運動、直接行動を特集してきて、今回は「1980年代」という「時代」をテーマにした。

掲載記事は、インタビューでは、反天皇制運動などの諸運動を天野恵一さん、指紋押捺拒否闘争を朴容福さん、横須賀の反基地・反核運動を新倉裕史さんにそれぞれ語ってもらった。一方、論考としては、杉浦郁子さんによるレズビアン解放運動、和田悠さんによる共働き女性のネットワーキング、兵頭淳史さんによる労働運動、原山浩介さんによる消費者運動の論文が並ぶ。また、特集外でも、アナキスト向井孝・水田ふうの資料をオンライン・アーカイブズとして公開している中島雅一さんと、社会的差別を研究する黒坂愛衣さんへのインタビューも掲載した。

各記事タイトルや内容の詳細は、インターネットや実際の書籍にあたっていただくことにして、ここではまず何より、6号全体の特集意図を説明しておきたい（編者共同執筆の6号の巻頭文も参照されたい）。

そもそも、私たち編者が『社会運動史研究』自体の刊行を始めたのも、過去の運動の歴史を忘却あるいは矮小化するような議論が目につくようになったからだった。中でも、今回取り上げた1980年代については、そうした傾向が甚だしいように思われた。テレビの「昭和回顧」番組などでも、学生運動など1960年代の「政治の時代」が、72年の連合赤軍事件で全て終わり、「シラケ」の70年代を経て、1980年代は脱政治化した消費社会、その頂点としてのバブル時代、という形で物語化されがちだ。

実際、私たちがこの特集テーマを選んだ最初の段階では、「1980年代の運動をわざわざ特集するの？？」と一瞬呑み込めない反応が見られた。本書が取り上げたような諸運動を想起できれば、「確かにいろんな運動があった」という結論になるはずだが、「時代イメージ」だけで語ろうとすると、社会運動は欠落しがちだ。こうした1980年代像への異議申し立てが、本書の中心的メッセージである。

この点については、一定程度ねらいを達成できたと思う。「闘う1980年代」というストレートなタイトルは、編者の1人としては「単純すぎる」という懸念もあったのだが、まさにそのシンプルで力強いメッセージゆえに、「1980年代＝脱政治化の時代」というレッテルを疑問に感じてきた運動当事者や研究者から、「我が意を得たり」と共感の声が届いている。さらに当事者世代からは、「自分たちの同時代史がようやく正面から取り上げられた」というトーンの、好意的な感想も聞かれた。正直に言うと、編者としてはそうした反響はあまり想定していなかったのだが、確かに、今現在の運動に関わる人たちの多くは80年代に（あるいは80年代こそ）いきいきと運動に参加していたのだろう。

一方で、「闘う1980年代」というわかりやすいメッセージは、時代論としてあまりに素朴なのも確かだ。既に寄せられた指摘としては、たとえば、本書で論じられている運動は、以前の時代（70年代以前）との関係で語られるものが多く、80年代に新しく参入してきた運動は手薄だ。このことは、「1980年代」という西暦10年区切りの時代区分が実は粗雑なのではないか、つまり80年代内のさらなる時代区分や変化について、もっと検討すべきだったのではないか、という批判にもつながる。そして、これに続く90年代を見据えたときに、80年代はどのように位置づけられるべきか、という重要な問題も残されたままだ。

とはいえ、本書が、「運動抜きの1980年代像」を覆すことには、出発点としての意味があるはずだ。「自分が参加・見聞したこの重要な運動が触れられていない」という指摘は、当然いくらでもありうる。それでも、ある程度目配りして編集したつもりだし、紙幅の関係もあり網羅的な「カタログ」を作ることはそもそもできない。むしろ物足りなさを感じた人々が、本書をきっかけにそれぞれの運動史を紡ぐことになれば、編者としては嬉しい（これは今号に限った話ではないが）。

（文責：松井隆志）

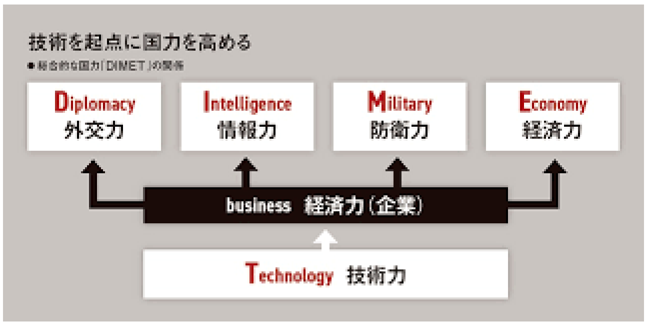
【雑誌漁り読み】ここまで来ている！日本版軍産複合体

『日経ビジネス』(2025年８月号)「特集　経済安保、企業が主役」

　未だに「経済合理性を欠く軍拡に財界からも反対の声があがらないものか？」という声を聞く。だが、1980年代、「軍産複合体化したアメリカ産業は軍事技術のバロック化によって国際競争力を失ったのに対して、戦後日本は民需主導で国際競争力を高めた」などということが言われたが、そんなことは“今は昔”。「防衛力」と「経済力」は一体不可分なものであることを前提に、「経済安保、儲かりまっせ！」になっている。そのことを端的に物語っているのが、『日経ビジネス』2025年8月号の「特集　経済安保、企業が主役」だ。そのリード文は以下である。

> **経済安全保障は、技術流出防止や規制対応など「守り」が注目されがちだ。だが経済安保の深化は本来、技術開発や世界展開など「攻め」にある。防衛力向上と共に、世界市場において日本の存在感を高める好機でもある。国民の暮らしと経済活動を支える造船・IT・半導体・宇宙産業などでどう戦うか、官民連携や企業間連携をいかに機能させるかが問われる。地政学リスクを把握し、商機をつかむ。そう、経済安保は経営そのものだ。・・・経済安保は政府が主導するだけのものではない。企業こそが主役なのだ。**

　「PART1　パワーベースの世界秩序を生き抜く　「DIMET」の時代　今こそ富民強国」のタイトルが示すように「力（パワー)」、即ち軍事力と経済力がベースであることを前提にし、“中国脅威論”に代表される「地政学リスク」を把握して経営せよというわけだ。



　ここでいう「DIMET」とは右の図のようなものだ。「技術力」を起点に「富民」、即ちビジネス（企業）が力をつけることが、「外交力」、「情報力」、「防衛力」、「経済力」、総じて「国力」を高めるという絵が描いている。

　「富民」というが「民」でなく企業。しかも司令塔は国家安全保障局経済班。中露のことを“国家資本主義”と批判するが、「官民連携」という名で“国家資本主義”化が構想されているのである。具体策は、宇宙戦略基金や経済安全保障重要技術育成プログラム（K Program）などでの資金面での支援。政府が経済安保に資する技術を対峙する→企業がそれに沿う開発案件を提案する→採択された案件に政府が資金を援助する、という段取りだ。挙句には、「現時点では国富増大にしない技術であっても国家安全保障から見て重要な技術であれば、政府が投資を支援する体制を整える」という「Run Faster」なる新概念まで打ち出した。公然と「国富よりも安保！」が語られ、その利権に企業が群がる時代に突入しているのだ！

　主となる産業分野は、「PART２　造船・IT・半導体・宇宙産業の最前線　復権の好機到来　官民新連携の号砲」というタイトルが示す通り。これらは、日米関税交渉の中でも投資対象としてあがった産業分野だ。例えば、造船は、海軍力に直結するということもあり、日米韓の連携も取りざたされている。「PART２」では、以下のように記されている。

> **日本の造船力は外交力の向上に貢献する。例えば、米国が重視する中国抑止を支援できる。／米中それぞれの海軍が保有する艦艇の数は300隻弱対400隻弱と見られる。米海軍がこの不利を補うためには稼働率を上げる必要がある。このため米海軍艦艇の修理・整備を日本の造船会社が担う体制づくりの議論を日米政府が進めている。**

　砕氷技術が「北極圏をめぐる国家間の競争に役立つ」とも言う。これが「地政学」に基づいたパワー（力）の発揮というわけだ。「IT、サイバーセキュリティ―」に関しては「国産AIも活用、能動的に守る」という。中国系機器に依存することへの懸念といった「地政学的な揺れ」を、日本製品を売り込むチャンスととらえ、企業の海外展開を国が支援するといった構想が提示されている。「半導体」に関しては、「公費２兆円投下、一世一代の賭け」という。公費で「富企業」の博打を打つというわけだ。「宇宙」に関しては、「スターリンク超えの技術目指す」。異なる軌道上の衛星間通信技術の開発にはK Programから600億円が提供されている。

　日本版軍産複合体はここまで来ている！　それを踏まえて反戦運動も構想しなければならない。**（文責:池田）**

【文化欄：反戦歌謡考③】

エレファントカシマシ（エレカシ）『It' s only lonely crazy days』対談

佐藤えり×池田

えり：　まずはWeb版第４号の池田の【爺のコメント】を受けて…チェッカーズは1983年９月21日に『ギザギザハートの子守唄』デビューして、シングルＢ面やアルバムでしかメンバーが作った歌は発表していなかったのですが（『ギザギザザハートの子守唄』も作詞は康珍化（1953年生まれ）で、ヒット曲連発時代の皆さんによく知られている歌は基本的に大先生が作詞作曲したものです）、1986年７月26日にリリースした『NANA』（作詞：藤井郁弥　作曲：藤井尚之）以降、メンバーが作った歌がシングルＡ面として発表されるようになり、セルフプロデュースのバンドとなります。チェッカーズの曲でフミヤの作詞のセンスが光る歌が多くなるのは、そのセルフプロデュース時期ですね。私のところにだけでなく、池田編集長のところにも「第４号のチェカーズの記事、面白かった」というお声を頂戴したようですが、『１００Ｖのペンギン』以外にもフミヤ作詞のチェッカーズの反戦ソングはあるので、また折を見てご紹介しますね。

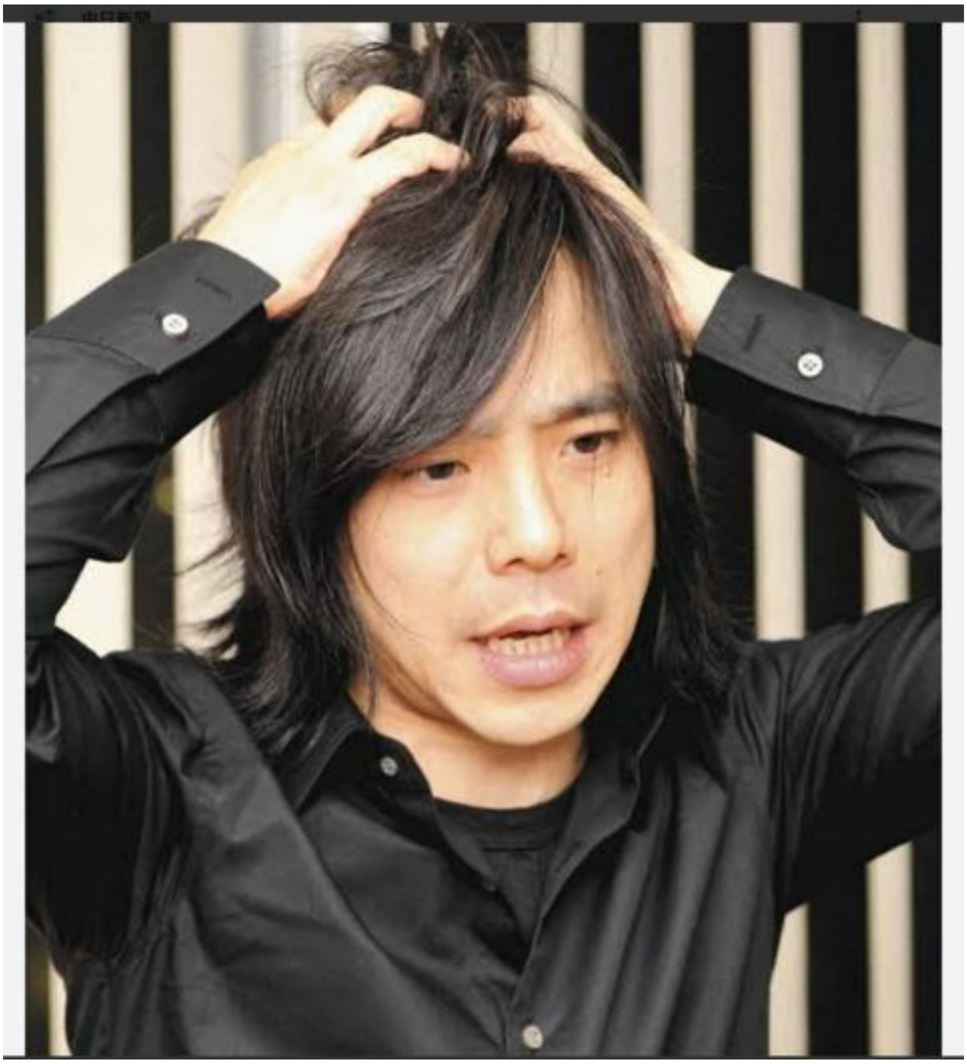
そして今回ですが、2023年３月８日に『yes.　I.　do』のカップリング曲として発表されたエレカシの『It' s only lonely crazy days』（作詞：宮本浩次　作曲：宮本浩次）をご紹介しようと思います。

『yes. I. do』（♫流れる時にあらがうわけじゃない　弱さにあらがいたいぜ　答えはいつもheartの中にあるのさ　yes. I. do）も素敵な曲ですが、反戦ソングをご紹介するコーナーなので、『It' s only lonely crazy days』の方です。以下、ボルドー字体が詞の抜粋ですが…

…時に考えてもしょうがねえ
俺たち行くしかねえのさ
you and me　すべてが it' s all right
now feel so good oh yeah

と始まるこの曲。何回聴いても、この後に続く歌詞についても「考えるな！感じろ！」と私には聴こえてしまうので…「なぜミヤジさんは戦争反対U.S.Aと叫んでいるのか」についての論考を私は諦めて、池ちゃんに丸投げすることにします。身振り手振り、仕草がミヤジさんにソックリな池ちゃん、解釈をど

うそ。（…と言うと、ミヤジさんファンに「全然似てねえ！」と怒られるのかな？ミヤジさんファンの読者の方がいらしたら先に謝っておきます。ごめんなさい。）



池田：　ウーン、本歌取り満載って感じだね。

…Please, please tell me だから I'm sorry
Oh yesterday 俺の愛する麗しい空よ
Sorry, sweet sweet sweet memory
一切が lonely
It's only lonely crazy days

「tell me」はローリング・ストーンズ。「It's only」も後に「Rock'n Roll」を付ければストーンズ。「yesterday」は言わずと知れたビートルズ。

えり：　その３曲の共通点は？

池田：　1960 年代。

えり：　それだけ？60 年代の曲が色々ある中で、なんでその３曲なの？って訊いてるのに…。

池田：アッ！「tell me only yesterday」とつなげりゃいいのか。「yesterday」は「crazy days」。

えり：「tell me だから I'm sorry」の因果関係は？

池田：「すみません、聞かせてください」？　わからん！

…All night and day 明日に向かって
行くぜ baby つまり rock on
It's alright, it's alright, right, right, right
一切合切 it's alright

歌詞解釈に戻るよ。「明日に向かって」の後に「撃て」を付ければ『明日に向かって撃て』（1969 年公開）だし・・・。原題は『ブッチとサンダース』。二人組の銀行強盗が西部から逃亡の果てにボリビアで銃撃戦の末に死ぬ話。1960 年代後半から７０年代頭に一世風靡したアメリカン・ニューシネマの代表作の一つ。死に急ぐアウトロー物はあの時代を象徴している。ボリビアと言えばゲバラも連想させる。

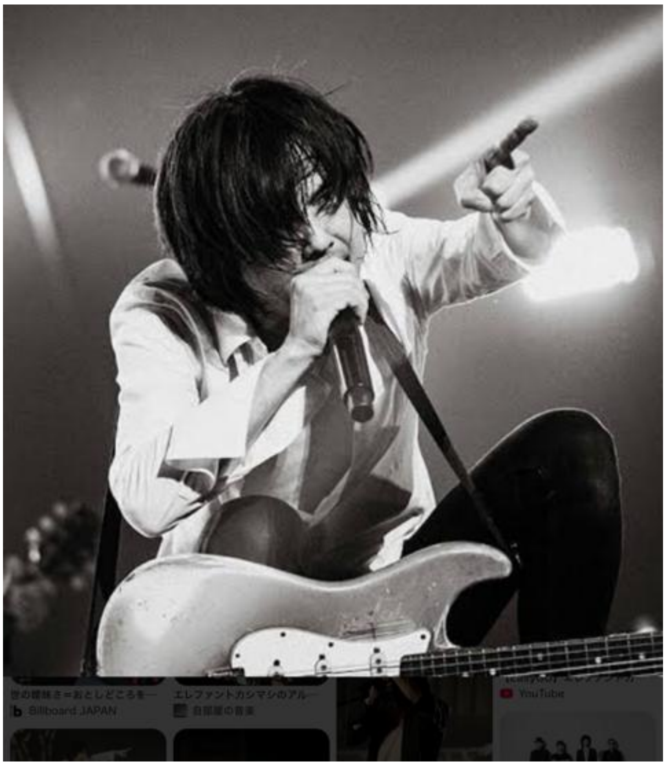
…Please, please tell me だから I'm sorry
Oh yesterday 俺は信じてきた revolution

Sorry, sweet sweet sweet story
一切が lonely
It' s only lonely crazy days

　ということは、「crazy days」は、“若者の叛乱の時代”ってことかな。だから「俺は信じてきた revolution」。とすれば「戦争反対USA」はベトナム反戦。「crazy days」の前には「lonely」が付いていて孤立・挫折を思い起こさせる。さらに「一切」と「lonely」を強調。そして見果てぬ夢、「sweet memory」になったとさってこと？
　この曲って、“若者の叛乱の時代”へのオマージュ？　「only yesterday」といえば1975年のカーペンターズの曲名でもある。日本的に言えば「シラケ世代」の時代に流行った。“遅れてきた世代”からの「sweet memory にしちゃって呑気なもんだ！」という全共闘世代への皮肉？　でも、「sweet memory」っていやぁ松田聖子『SWEET MEMORIES』、1983年。80年代なら全共闘世代の武勇伝聞かせられてたまんねぇやってわかるんだけど、何で2023年になってこんな曲唄うの？

えり：　ミヤジさん、『赤いスイートピー』ならカバーしていますよ。2020年11月18日にリリースした『ROMANCE』というカバーアルバムの中で。『赤いスイートピー』も『SWEET MEMORIES』も作詞は松本隆（1949年生まれ）ですね。

池田：松本隆について語り出すと、ハッピーエンド、さらにはエプリルフールに遡らないと・・・。エプリルフール時代に「ミュータントがわななく、わななく」なんて歌詞を書いていたのに、「好きよ、好きよ、キャプテン」には驚いたけど・・・。キリがないので、エレカシに戻るよ。



…襟を正して sunrise
いかした台詞で全開
不粋な showbiz テンパってんじゃん
戦争反対 U.S.A

　「襟を正して sunrise」ってどういう意味？　「平和国家になりました」と高度経済成長ってこと？　「不粋な showbiz」って何だ？　60年代末の日本のロックシーンを指してんのかなぁ？　それとも「戦争反対USA」自体が「不粋な showbiz」でしかなかったじゃないかと揶揄してんのかなぁ？　“若者の叛乱”は、「戦後の平和と民主主義」への懐疑を突きつけたんだけど・・・。
　1960年生まれの僕は“後追いの後追い世代”。ミヤジ君となれば、“もっともっと後追い世代”。混乱していて当然だけど・・・。

えり：　ミヤジさんは1966年生まれですね。

池田：　ミヤジ君みたいに頭グシャグシャ掻きたいよ！
　それにしても、“若者の叛乱”を越える「夢」を紡げなかったことも“残念な事実”。そんな自分たちへの苛立ちの叫びっていう風にも聴けるね。

えり：　それ以上頭掻きむしってどうするんですか？結局よくわからないから、とりあえず今日も楽しく歌って楽しく飲もう！「**♫目指すぜ future have a nice day**」
　この曲の解釈を何か思いついた読者の方がいらしたら、池田編集長にご一報ください。

【科学哲学への招待③】

【雑誌読み漁り】で、経済安保において重視されている技術に関して触れた。それは「関税交渉」という名での日米経済安保交渉でも重視されているものとほぼ重なり、日本政府が対米投資拡大でも対象とした分野にも当たる。【雑誌読み漁り】では触れられなかったが、量子コンピュータはじめとした量子関連技術もその一つである。そこで、今回は量子力学について書いてもらうことにした。 **（編集担当者）**

エルヴィン・シュレーディンガー 著『精神と物質』（中村量空 訳、1987年、工作舎）

第一章　意識の物理的な基盤
1一脳と脳の描きだす世界についての問題
2一試みの解答
3一倫理の自然科学的理解
第二章　知力の未来
1一生物学的な意味での袋小路か？
2一ダーウィンの進化論に見られる明らかな陰り
3一行動の影響による選択
4一ラマルクの進化論の誤り
5一遺伝学的な意味における習性と技能の固定化
6一知性の進化にとっての危険性
第三章　客観化の原理
1一「真実世界の仮定」のもたらす矛盾点
2一ユングとシェリントンの説
3一人格は個体の内部に見い出しうるのか？
4一現代物理学における主体と客体
第四章　算術上の矛盾ー精神の単一性
1一多元の意識的自我と一つの世界
2一シェリントンの矛盾
3一世界のすべてが演じられる舞台としての精神
第五章　科学と宗教
1一時間の概念
2一プラトンのイデアの世界
3一カントの時間と空間の観念
4一アインシュタインの相対性理論
5一時間の統計的理論
第六章　感覚的性質の不思議
1一人間の感覚
2一光の物理学的特性
3一観測された事実と科学的理論
解説　シュレーディンガーの思想　中村量空
1一旅立ちのとき
2一統一への道
3一合理主義か神秘主義か

光に近い速度、強い重力場、ミクロなレベルについての記述・説明は十分にできない古典物理学に対して、それぞれ特殊相対性理論、一般相対性理論、量子力学が確立されて記述・説明されるようになりました。今回ご紹介するのは、その量子力学の確立に多大な貢献をした、オーストリアの理論物理学者で思想家エルヴィン・シュレーディンガー（1887年8月12日一1961年1月4日）です。

シュレーディンガーは1906年よりウィーン大学で、物理学を研究すると同時に、進化論やショーペンハウエルの哲学を学び、この頃の思索遍歴の過程でシュレーディンガーの哲学の基礎が形成されました。（『精神と物質』でも、「第二章　知力の未来」では「ダーウィンの進化論に見られる明らかな陰り」や「ラマルクの進化論の誤り」、「第五章　科学と宗教」では「プラトンのイデアの世界」や「カントの時間と空間の観念」についても論じています。）物理学者ルートヴィッヒ・ボルツマンは、シュレーディンガーが入学する直前に自殺していますが、当時のウィーン大学はボルツマンの影響が強く、シュレーディンガーはのちに「ボルツマンの考えた道こそ科学に於ける私の初恋と言ってもいい」と述懐しています。シュレーディンガーは第一次世界大戦には砲兵の士官として従軍し、戦後学問研究の世界に復帰して、1921年、チューリッヒ大学の教授に就任します。

ここから〈３分で読んでわかったような気になる「量子力学」〉のコーナーです。「電磁波である光は粒子のようにも振る舞う」というそれまでの考えに対して、1924年にルイ・ド・ブロイが「粒子は波のように振る舞う」という電子の波動説を提唱すると、その電子の波動説に基づいて、1926年、シュレーディンガーは「波動力学」（電子が干渉し合い波のように振る舞う現象を説明する数学的な理論）を提唱しました。この理論では各電子は波動関数によって記述され、電子の振る舞う仕方は「シュレーディンガー方程式（波動方程式）」に従います。量子力学では粒子は一定の物理量を持たないため、観測する度に確率分布に従ってランダムに測定結果が予測され、この「シュレーディンガー方程式」はその確率分布を予測するものです。状態について、理論上は確定した値をもつ測定ができる古典力学と、確実な測定結果として予測できない量子力学との違いがここにあります。

1927年にはベルリン・フンボルト大学の教授に就任したシュレーディンガーですが、1933年にヒトラーが政権を掌握すると、ユダヤ人学者への弾圧に反対して辞職し、同年イギリス、翌年アメリカへ渡ります。量子力学の測定問題に関する思考実験「シュレーディンガーの猫」を発表したのが、その頃1935年です。この思考実験

は、放射性の粒子が放射される確率が50%の箱に、毒の入った瓶と猫が入れられており、粒子が放射されれば瓶が割れて猫は死に、粒子が放射されなければ猫は生きていますが、箱を開けるまで猫が生きているか死んでいるかの状態は観測できない、というものです。シュレーディンガーによれば、箱を開けて観測する前までは、猫の生死の観測の確率は50%で、猫は生きている状態と死んでいる状態の重ね合わせにあるため、猫の状態が何であるか言うことができないということになります。しかし、箱を開けると、状態の重ね合わせは崩壊し、生きている状態に崩壊すれば猫が生きているのを観測し、死んでいる状態に崩壊すれば死んでいるのを観測することになるわけです。ということは、箱を開けた観測時にすべてが瞬間的に起こらなければならないのでしょうか…というのが「シュレーディンガーの猫」のパラドックスです。

　私が言語哲学を専攻するか迷いながらも結局、科学哲学を専攻するキッカケになった「シュレーディンガーの猫」の話を書いていたら長くなってきてしまいましたが、池田編集長に「もっと短く」と文句を言われるので、そろそろ終わらせないと…（でも〈3分で読んでわかったような気になる「量子力学」〉を書けた気がする）。シュレーディンガーは第二次世界大戦中アイルランドに亡命し、1956年オーストリアに帰国して、1958年にこの『精神と物質』の原書“Mind and Matter”を出版しました。

　「無数の観測者がいて、無数の精神があるのに、客観的な物質的世界が一つだけなのはなぜでしょう？」「客観的な物質的世界は一つだけと言えるのはなぜでしょうか？」…など精神と物質の関係について考えてみませんか。

（文責:佐藤えり）

藍苑のアイドル「機械ネコのジュリアちゃん」 故横山哲也さんが「ミャーミャー五月蠅い！」とドツイてましたが・・・。機械ネコに心はあるのか？ シュレーディンンガーのネコになれるのか！？

【自衛隊動向】

7 月 18 日 NBC 兵器(核、生物、化学兵器)への対処等も任務とする陸上自衛隊特殊武器防護隊・化学防護隊の一部部隊への女性自衛官の配置制限を解除。これにより、陸・海・空 3 自衛隊で女性自衛官の配置制限が"完全撤廃"された。

7月30日 防衛省、陸海空3自衛隊が毎年持ち回りで開催している観閲式(観艦式、航空観閲式)について、今後は原則実施しないと発表。「厳しさを増す安全保障環境」への対応で自衛隊の任務が増大し、行事の維持が「困難な状況」になったという理由。朝霞観閲式反対闘争をしなくてよくなったとは言えるが、呑気に軍事パレードしている自衛隊から平素から実戦態勢を構築した実働する自衛隊への変貌を思えば、喜べない話。

7 月 31 日 三菱重工、陸上自衛隊朝霞駐屯地で 7 月 17 日から実施された首都直下地震発生時の対処能力向上を目的とする実動訓練に参加したと発表。同訓練は、陸上自衛隊東部方面隊が自治体などと連携して実施。三菱重工は開発中の中型マルチコプター型無人機と垂直離着陸機(VTOL)型無人機を活用した救援物資輸送訓練を行った。

8月1日 防衛省航空自衛隊、クラウドコンテンツ管理に Box を採用。株式会社 Box Japan が発表。Box 導入によって、容量を気にすることなく、47,000 名を超える全隊員が最新のデジタル環境下で生産性の向上及び業務効率化、さらにセキュリティ強化を実現すると言う。Box は、カリフォルニア州レッドウッドシティーに本社を置くインテリジェントコンテンツ管理(ICM)プラットフォームのリーディングカンパニー。企業のコラボレーション促進や、コンテンツのライフサイクル全体の管理、重要なコンテンツの保護、エンタープライズ AI によるビジネスワークフローの変革を実現することを目指す。ヨーロッパ、アジアにも拠点を持ち、大手グローバル企業や日本では約 20,000 社および日経 225 の 77%の企業の業務効率化を支援。株式会社 Box Japan は 2013 年に設立された日本法人。

8 月 4 日~12 日

西太平洋で、日本、イギリス、アメリカ、オーストラリア、スペイン、ノルウェーによる 6 か国共同訓練を実施。

8 月 5 日

・陸上自衛隊、9 月に、アメリカ海兵隊などと離島の防衛を想定した大規模な実動訓練「レゾリュート・ドラゴン」を九州、沖縄や北海道で行うと発表。

・日本が最新鋭の護衛艦をベースにした共同開発を提案しているオーストラリアの新型フリゲート艦の導入計画について、オーストラリア政府は日本の提案を選定したと発表しました。正式に契約が結ばれれば日本にとってこれまでで最大規模の防衛装備品の輸出になる。

8 月 6 日 陸上自衛隊宮古島駐屯地トップの比嘉隼人宮古警備隊長(1等陸佐)が、新隊員の徒歩防災訓練を監視していた市民に対して「許可を取ってこい」と恫喝。

8 月 7 日

・航空自衛隊の「F2」戦闘機が茨城県沖の太平洋上空で訓練中に墜落。

・自衛隊で初めての配備となるステルス戦闘機 F35B、3 機が、宮崎県の航空自衛隊新田原基地に到着。

8 月 9 日 英軍の F35B 戦闘機が海上自衛隊の護衛艦(「かが」)に初めて着艦。米軍の F35B もかがに着艦。海自は 4~12 日にかけて米英軍などと共同訓練。F35B を搭載する英空母「プリンス・オブ・ウェールズ」は訓練後、横須賀に寄港。

8 月 12 日 木更津市の陸上自衛隊木更津駐屯地に、5年間を期限として暫定配備されていたオスプレイ1機が 12 日、本来の配備先の佐賀駐屯地(佐賀市)へ飛び立った。これで暫定配備されていた 17 機すべてが木更津を離れ、移駐が完了した。

8 月 14 日 中国海軍の空母2隻が6月に日本周辺の太平洋上などに展開した際、自衛隊が、沖縄県・尖閣諸島周辺の海域で、空母に対する攻撃訓練を行っていたことが分かった。

8 月 17 日 大分県にある陸上自衛隊の「日出生台演習場」で、訓練中に隊員 2 人と連絡が取れなくなり、翌日未明、演習場内で死亡しているのが見つかる。落雷によると発表。

8 月 20 日

・うるま市の米軍ホワイトビーチ沖合で米海軍の艦船「ニューオーリンズ」(全長208・4メートル、総トン数2万4433トン)が火災。海上自衛隊船舶も消火活動に当たる。

・中谷防衛大臣は訪問先のトルコで無人機を製造する防衛産業の事業所などを視察し、今後、トルコ製の無人機の導入について両国の間で協議していく考えを示した。

・27 年度までに予定していた航空自衛隊の「航空宇宙自衛隊」への改編を、26 年度に実施することが判明。

8月21日
・退役が予定されている海上自衛隊の護衛艦の調達を検討しているフィリピン海軍が今月、長崎県の佐世保基を訪れて護衛艦の視察を行ったことが判明。
・中谷防衛大臣、訪問先のヨルダンでハッサン首相兼国防相と会談し、中東情勢が緊迫化した際、在留邦人の退避に協力してくれたことに謝意を伝えるとともに、防衛協力を促進することで一致。
8 月 23 日　中谷防衛大臣、日本を訪問したノルウェーのフロム国防副大臣と会談し、戦闘機に搭載するノルウェー製の「スタンド・オフ・ミサイル」の調達などを含め、両国の防衛装備や技術協力を進めていくことで一致。
8月24日　与那国町町長選で、自衛隊の「さらなる増強」に慎重姿勢を示す新人の上地常夫氏が初当選。
8 月 25 日　インドネシアとアメリカが中心となって行う多国間の合同軍事演習が始まる。自衛隊が 4 回目の参加。規模を拡大し、海上自衛隊と航空自衛隊も初めて派遣。
8月28日
・海上自衛隊潜水艦ディーゼルエンジンの燃料性能に関するデータを製造元の川崎重工が改ざんした疑いがあることが判明。
・英空母プリンス・オブ・ウェールズ、東京港入港。31 日には、江東区の東京国際クルーズターミナルで一般公開。帰路、同名戦艦が旧日本海軍の攻撃受け沈没した場所で、日英合同慰霊祭。
・日英防相会談。サイバー・宇宙分野での連携強化を確認。英・ヒーリー国防相、「近く、自衛隊の F15 戦闘機がヨーロッパに初展開する」と公表。
・陸上自衛隊とアメリカ海兵隊が9月 11 日から行う実動訓練の中で、アメリカ陸軍のミサイルシステム「タイフォン」が岩国基地に展開されることが明らかに。
・防衛省が、来年度予算案の概算要求。、過去最大となるおよそ８兆8000億円を求める。
8月29日　石破・インド首相モディ首脳会談。半導体や重要鉱物、AI、医薬品といった分野での協力を強化するための「経済安全保障イニシアチブ」という新たな枠組みの創設で合意。安全保障分野では 2008 年に署名した「共同宣言」を改定し、防衛協力の具体策を盛り込むことを確認。

【編集後記】
新たに「自衛隊動向」を新設しました。「戦後 80 年」の“福島・広島・長崎”報告を軸にした“特集”的な作り方をしようと試みたのですが、上手くいきませんでした。今後も改善していきたいと思っています。
毎月第一火曜日「編集会議」（次回９月２日、次々回10月７日　19:00　藍苑さん）です。興味のある方、ご参加ください。